

Book Review

歯界展望別冊 補綴装置および歯の延命のための 最新治療指針

矢谷博文・峯 篤史・中島純子・市川哲雄 編



Reviewer

高橋 哲 Tetsu Takahashi

(東北大学大学院歯学研究科口腔病態外科学講座 顎顔面・口腔外科学)

A4判変, 160頁
オールカラー
定価(本体5,800円+税)
医歯薬出版刊



歯界展望の別冊である本書『補綴装置および歯の延命のための最新治療指針』は、いかに歯と補綴装置を残すかについて、最新の治療法や考え方をまとめた成書である。本書は6つのPartに分かれており、それぞれ「破折歯根」、「外傷歯」、「根尖部病変」、「歯周組織の炎症」、「口腔内環境の劣化」、「力のコントロール」といったテーマについて、各分野の最前線で活躍する臨床家と研究者によって最新の治療法などがまとめられたものである。

口腔外科の専門バカで、一般歯科の臨床から遠ざかっている私が、“今、最前線の歯科治療はどうなっているのだろう”，と本書を手にとって読んでみると、まさに目から鱗の内容ばかりであった。

まずはPart1「破折歯根の治療とその予防策」である。「定期的にメインテナンスをされている患者における歯の喪失原因は、齶蝕や歯周病よりも歯

根破折が圧倒的に多い」という冒頭の扉文に示されていた事実を、私自身全く知らなかったのは恥ずかしい限りである。そして、歯根破折に対する最新の治療指針が示されており、大変参考になる。「外傷歯の治療と予後」と題するPart2では、外傷歯に対する補綴的対応について、外傷の種類ごとに簡潔にガイドラインに沿って述べられており、大変有用である。

Part3「根尖部病変の診断・治療・予後」とPart4「歯周組織の炎症」ではそれぞれ、根尖病巣の治療と予後、歯周治療のエビデンスと近年問題になっているインプラント周囲炎についての最新治療が述べられている。Part5「口腔内環境の劣化」においては、超高齢社会の到来や生活習慣による口腔内環境の劣化に焦点を当てられており、大変斬新な切り口で興味深い。

最後のPart6では「力のコントロール」がその主題として述べられている。

“歯と補綴装置の予後を左右する因子を突き止めて行くと、力の制御と感染の制御の2つの問題に帰着される”，という冒頭の扉文にある市川哲雄先生の言葉は、歯および補綴装置の延命のために、今後の科学的根拠に基づく治療の確立の指針になる、大変重要な点であると思われた。

歯科の専門性が進む現在、他の分野で今何がトレンドなのか、その分野の治療のガイドラインはどうなっているのか、なかなかわからないものである。私のように他の分野の治療から遠ざかっている方が読めば、最新の歯科治療の事情を知ることができる。また若い歯科医師の方々にとっては、臨床の基本的な治療の指針が示されているといえる。本書は各分野の基本から最新事情まで網羅されており、さまざまな年代・立場の歯科医師にとって得るものがある内容と言えるだろう。